温知会と標石

会員　小川　宣

「オンチカイ」というと、カラオケブームの昨今、すぐに「音痴会」を連想しがちであるが「温知会」というのは、「温故知新」の心境から生まれた会のことである。

この「温知会」について、昭和四十年に刊行された「徳山の文化に貢献せし人々」（梅原芳堂）によると、次のように記されている。

「旧藩主と旧士族の厚情を温めるため結成したもので、盛時は三百余名に及び、毎年一回毛利邸の大広間を開放して総会を開いたが、創立は明治六年、旧藩主一族の東京移住により藩士及び家族の会となったが、毎年旧藩主帰徳せらるる際総会を開いた。昭和六年に会則を定め、本城嘉守を会長とした。以来ますます盛況を極めたが、昭和二十一年華士族制度の廃止とともに解散して祐姦講と改め現在は小規模である。」

また、徳山市史年表によると、昭和四年に「本城嘉守ら温知会結成」とある。

これらの資料によると、「温知会」は明治六年、旧藩主を中心に旧士族の主な者で結成されたもので、藩主一族が東京移住後も続けられていたが、昭和四年になると、当時の町長本城嘉守を中心にして、旧藩士の範囲をさらに広げ、旧徳山藩にゆかりのある者も含めて再編成されたようである。昭和六年に会則を定めて本城嘉守が初代の会長となった。それ以来、毎年総会を開催していたようで、会場は毛利邸を使用していた。

さらに、「温知会」についての記録をたどると、昭和十年五月一日に富田の護国神社の例祭の折に、この「温知会」が燈籠を一対寄進している。この燈籠は今も護国神社の境内にあり、表に「清輝」と記し温知会の名がある。

さらに、他の記録によると、昭和十一年十月二十二日に徳山毛利邸で「温知会」の総会が開催され、会員三百名が出席したことが記されている。昭和十一年は、王政復古七十周年の年に当たり、全国各地でこれを記念するために、

いろいろな行事が計画され、徳山市でも十二月十二日に殉難志士の慰霊祭が挙行されたという。これに先がけて、郷土史家の一人である松原政之氏が、十月二十二日の「温知会」の総会の折に「長藩の勤王事蹟」と題して講演している。この講演内容が、十二月十二日付で徳山市役所から刊行された「殉難志士の面影」におさめられている。

昭和十一年の王政復古七十周年の頃が「温知会」の活動の最も活発な時だったと思われる。というのは、昭和十一年といえば日中戦争のはじまる一年前で、日本は中国大陸をめぐる問題で非常時局に直面していた折で、幕末の勤王志士の憂国の気概を偲び、当時の国民の士気を鼓舞する必要があったからであろう。

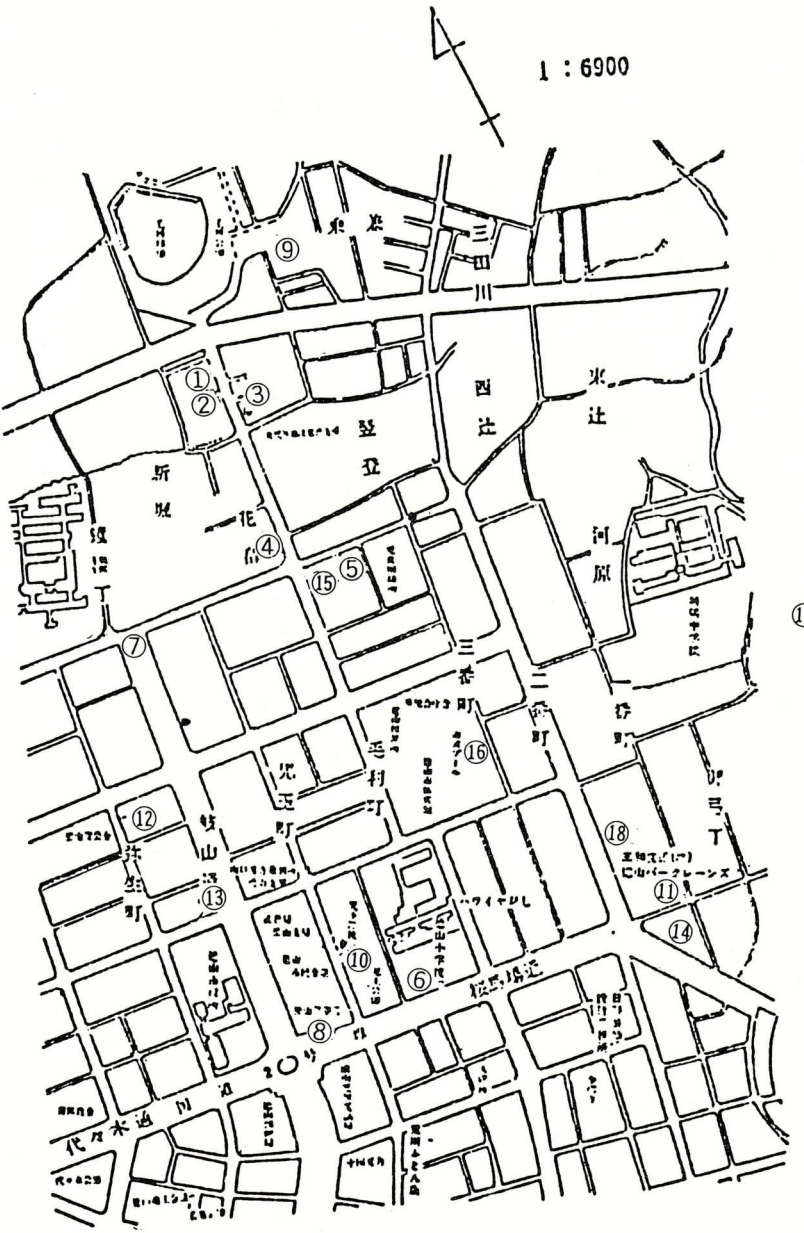
15

丁度この頃、「温知会」の事業の一環として、これら勤王志士を中心として藩政時代から明治維新にかけてのそれぞれのゆかりの地に標石を建てたものと思われる。この標石の文字は私の叔父の河合利雄さんが書いたということがわかったので、関係者に尋ねたところ、当時五十余り書いたとのことで、その文字を標石に刻りつけて建立したとのことで、費用の大部分は旧藩主の毛利さんが負担されたとのことであった。

その後の資料によると、三十数カ所が確認されているが、昭和二十年の戦災とその後の都市計画によって、その中の半数近くが失われ、昭和四十三年に調査した時には十六カ所残っていたにすぎなかった。その後の調査で二カ所見つかったが、二カ所紛失していた。

現存している標石の主なものは、禁門の変の責任を負って宗藩の三家老が幽閉・切腹したことを示すもの、徳山藩の殉難七士に関するもの、そのほか藩政時代ゆかりの場所を示すもので、徳山藩時代を想起させ、特に幕末から明治維新にかけての様子がよくわかり大変貴重なものである。失ったものを復元して徳山の歴史の一端を後世に伝えたいものである。（昭和六〇年一〇月六日例会発表）

現存する徳山藩時代に関する標石（本誌P・30参照）

1　旧藩邸一之門（その後紛失）
2　旧藩作事方跡
3　旧藩武方跡
4　旧藩花畑練兵場跡
5　旧藩政府跡（その後紛失）
6　旧藩学館跡
7　本城三儒屋敷跡
8　奈古屋蔵人屋敷跡
9　杉家屋敷跡
10　勤王七士之碑
11　本城清誕生地・江村彦之進屋敷跡
12　井上唯一屋敷跡
13　福原元僩幽閉之地
14　国司親相幽閉賜剣之地
15　益田親施幽閉賜剣之地
16　浅見安之丞屋敷跡・児玉次郎彦誕生之地
17　旧藩新角場跡（その後見つかったもの）
18　飯田忠彦誕生之地（その後見つかったもの）
熊野神社前　旧藩台場跡（その後に復元したもの）
遠石三丁目　旧藩舟方跡（その後見つかったもの）

標石による徳山藩時代の遺跡地図（昭和四十三年）